

# ハイチ革命をめぐるカリブ海知識人の視座

—— C・L・R・ジェームズ『ブラック・ジャコバン』を中心に ——

尾崎文太

## Abstract

Cyril Lionel Robert James (C. L. R. James), born in 1901, is a Trinidadian historian, journalist and writer. He wrote *The Black Jacobins, Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution* in 1938. It was one of the first studies about Haitian Revolution and its black leader Toussaint Louverture written by Caribbean intellectuals. Haitian Revolution began in 1791, just two years after the French Revolution. At first, it was an insurgence of Black slaves but step by step, it got better organized and the black leader, Toussaint Louverture adopted French Revolution's philosophy into Haitian Revolution. So Black slaves began to insist on their own liberty and human rights, which had been guaranteed in *the Declaration of rights of Man and Citizen* in French Revolution in 1789. After a decade of revolution and independence war against France, finally, Haiti declared their independence in 1804. It was the birth of the second independent Republic in the New World. It was also the first independent nation built by ex-Black slaves in the world. In this article, we will see, by analyzing and criticizing this James' study on Caribbean history, how important this memorial revolution was for Caribbean people in their history. We also verify how this revolution contributed to establishing Caribbeans' regional identity.

**Keywords:** C. L. R. James, Haitian Revolution, Toussaint Louverture, French Revolution, Aimé Césaire

## 1. ハイチ革命—フランス革命の一章か？ カリブ海地域の固有の革命か？—

筆者が高校生だったころ、世界史の授業で「ハイチ革命」について習った記憶がない。ラテンアメリカ諸国の独立のくだりで、歴史教師がシモン=ボリバルやサン=マルティンの名を口にしていたのはおぼろげに覚えているが、彼がトゥサン=ルヴェルチュールという黒人指導者について何かを語っていた記憶はやはりない。しかし、現在の山川出版社の世界史用語集において、「ハイチ革命」の重要度は最も高い7にカテゴライズされており、「ラテンアメリカの独立」の6よりも高く設定されている。人物でいうと「トゥサン=ルヴェルチュール」が7で「シモン=ボリバル」の7と同点、「サン=マルティン」は5である<sup>1)</sup>。カリブ海の小さな島の革命に過ぎないハイチ革命だが、その重要性に対する認識が数十年のうちに変わってきたのだろうか？ 筆者自身カリブ海地域をフィールドとする研究者として、本論考では、この革命が世界史の中で持ちうる特別な意味について、カリブ海の地域的文脈に照らしながら考えてみたいと思う。

1804年、カリブ海のフランス領サン・ドマングは、ハイチ共和国として、宗主国フランスからの独立を宣言する。ハイチは諸アメリカにおいて、アメリカ合衆国に次いで二番目の共和国として独立を果たした国家であり、それは「史上初めての黒人共和国」の誕生であった<sup>2)</sup>。しかし、「黒人共和国」という表現は奇妙に聞こえるかもしれない。共和国という概念に人種概念がいかに関わってくるのであろうか？ この問題に関しては、まず1805年5月20日に発布されたハイチ憲法を参照したい。ハイチ憲法第14条には人種概念に関して以下のような明確な規定がある。「国家の長という父を持つ唯一にして同一の家族の子供らにあっては、必然的にあらゆる肌の色の許容は廃止されるべきであり、以降ハイチ人は、黒人という一般名のみによって知られることになる。」また、第12条においては、ハイチ領土内での白人の支配および財産所有を永久に禁じている。「いかなる白人も、その国籍にかかわらず、支配者あるいは所有者としての資格でこの地に足を踏み入れることはできず、この地ではこの先いかなる所有権も認められない。」但し第13条において、政府がハイチ人としての帰化を認めた白人女性、およびドイツ人、ポーランド人〔ここでは、革命で独立軍に味方してフランスと戦ったドイツ人、ポーランド人を指す〕は、第12条の範囲ではないと定められている。すなわち、そのような白人女性、ドイツ人、ポーランド人は、必然的に第14条の定義に含まれることになり、すなわち彼ら／彼女らも「黒人」に含まれることになる。ロナルド・シーガルは、これは「『黒』という言葉がイデオロギー的な意味で使われるようになった歴史上最初のケースかもしれない<sup>3)</sup>」と指摘している。

このようにハイチ革命はいくつかの特徴的な性質を持つ歴史的事件である。しかしながらこれまで、ハイチ革命に関する研究は十分になされてきたとは言い難い分野であり、また数

少ないそれらの研究も、フランス革命の中の一章として、すなわちフランス革命研究に付随する形でなされる場合が多かった。フランソワ・フェレとモナ・オズーフによる『フランス革命事典』の1992年版を見ると、「サン・ドマングの革命」の項目の冒頭に、以下のような記述がある。

サン・ドマングの奴隷の大反乱は、フランス革命の歴史の中でも最も面食らう事象であり、そして恐らく最も知られていない事象の一つであろう。[...]それはフランス革命の内部の一つの革命である[...]。サン・ドマングの諸事件は、フランス革命に並行して展開した。それらは、フランス革命の熱狂と矛盾と高揚を持ち合わせていた。そして、フランス革命の恐怖と死を知っていた<sup>4)</sup>。

このようにハイチ革命研究は、多くの場合、フランス革命研究の内部の一項目であり、それはフランス革命との関係性において語られる。

日本におけるハイチ革命研究の先駆者である浜忠雄は、ハイチ革命を研究することで、フランス革命研究においてこれまで語られることの少なかった問題が浮かび上がってくると主張する。それは、フランス革命が高らかと掲げた原則や理念と、フランスが取り組まなければならなかった植民地問題の現実との間に生じる矛盾の問題である。浜は次のように書いている。

「人権と自由と民主主義の祖国」が、「文明は非文明を文明化する責務がある」と標榜して繰り返してきた侵略戦争と植民地支配の歴史。[...]こうした事実を知るに及んで、人間同士の不平等を正当化する論理が、実は、フランス革命と「人権宣言」そのものにあることに気付いたのである。「人権宣言」の論理には[...]、白人と非白人との間の、[...]「文明」と「非文明」との間の差別化を自明のものとする論理が存在する。ハイチは「人権宣言」の「普遍性」を検証する「リトマス試験紙」となり、こうして、否応なくフランス革命の「脱神話化」を迫られることになったのである<sup>5)</sup>。

実際、18世紀末および19世紀初頭における革命フランス政府の植民地政策を見る限り、「人間と市民の諸権利の宣言」における大文字の「人間」l'Hommeの概念に非ヨーロッパ人、非白人は含まれていなかった。フランス革命の当初、「宣言」に謳われた「人権」の概念が植民地の黒人に適用されることはなかった。植民地経済に依存せざるを得なかった革命フランスは、革命の理想と奴隷制の現実の間の矛盾を乗り越えることを躊躇していた。そのことはすなわち、当時の歴史的状況におけるフランス革命の限界を示唆する。そして、それはと

りわけ、フランス革命の影響を受け、フランス革命と並行して起きたカリブ海の黒人革命、ハイチ革命を研究することによって、より具体的に理解できる。浜は、このようにフランスが続けてきた植民地政策の現実からフランス革命を批判的に検証し、それを「脱神話化」した先に、再度革命の原則を「再構築」し、それが『時代』を超え『民族』を超えて共有する理想」としての普遍的射程を備えるものとしてとらえなおす必要性を説く。そのためにこそ、ハイチ革命というカリブ海の黒人革命をフランス革命の問題系に接ぎ木して分析する視点が必要だと言うのだ<sup>6)</sup>。

確かに浜の主張するように、フランス革命の可能性を普遍的な地平にまで拡張するために、すなわち人権宣言の原則、共和国の理想を全人類が共有すべき公準にまで昇華させるためには、あえてハイチ革命という特殊な革命の分析によって明るみに出たフランス革命の限界、すなわちフランス革命の理想と植民地主義の現実の間の矛盾という否定的側面に取り組むことが必要であるというのは理解できる。しかしながら、カリブ海という地域の文化、文学、歴史等の研究を進めてきた筆者にとって、このカリブ海の黒人革命の価値は、決してフランス革命の「限界」の認識とその「再構築」に貢献するだけのものではない。フランス革命とほぼ並行して起きたハイチ革命は、フランス革命の強い影響を受け、それと強い関係性を結びながら進行したことは紛れもない事実であるが、同時にハイチ革命は、フランス革命とは異なる歴史的な脈の中で独自の問題系を持ち、その成就是この地域において独自の価値を持つ。ハイチ革命の問題系は、フランス革命の問題系に結びつきうるが、同時にそれはカリブ海という特殊な歴史的経験を共有する地域の問題系の中で語られるべき革命である。そこには、人種の問題、奴隷制の問題、階級の問題、植民地の問題がある。「史上初めての黒人共和国ハイチ」とは何を意味するのか？ この問いは、植民地と奴隷制という特殊な歴史的経験と記憶を共有するすべてのカリブ海の知識人にとって問い直されなければならないものである。カリブ海の知識人がハイチ革命を見る時、彼らはフランス人が見る見方とは違った見方でそれを見る。フランス人は、ハイチ革命というフィルターを通してフランス革命を反省的に見る。しかしカリブ海の知識人にとって、ハイチ革命はなによりカリブ海人のアイデンティティ形成の嚆矢である。そしてハイチ独立の意味をめぐるカリブ海の地域的問題系は、20世紀を通してしばしば、アフリカの問題、とりわけアフリカの解放・独立と結びついていた。

本論考では、カリブ海の知識人がハイチ革命について扱った最も重要な研究の一つである、トリニダード出身の作家C・L・R・ジェームズの1938年の著作『ブラック・ジャコバン』を中心的に扱うことによって、カリブ海の知識人が、ハイチ革命をどのような問題系の内で捉え、そこにどのような固有の価値と可能性を見いだしていったのかについて分析をしていきたい。

## 2. ハイチ革命の歴史的経緯

カリブ海の知識人によるハイチ革命研究の意味を検討する前に、そもそもハイチ革命とは何か、どのような状況の下でどのように進行していったのかを概観しておく必要があるだろう。

まず18世紀末の、フランス領サン・ドマングの状況と本国フランスとの関係について見てみよう。トリニダード出身の歴史家エリック・ウィリアムズは当時のサン・ドマングの様子を次のように記している。

アメリカ合衆国が独立した1783年から、フランス革命が起こった1789年までのサン・ドマングの発展は、帝国主義の歴史の中でも驚異的なものだった。[...]サン・ドマングはヨーロッパ全体のおよそ半分の地域に熱帯性物産を提供した。その輸出は全英領西インド諸島の輸出を3分の1ほど上まわり、1000隻の船と15000人のフランス人船員を雇用した。サン・ドマングは、世界最大の砂糖産地として、「カリブ海の珠玉」となった<sup>7)</sup>。

そしてこのカリブ海の植民地の繁栄は、宗主国フランスに巨大な利益をもたらした。フランス革命の主体となったブルジョワジーには海運業を営む者が多く、その経済的基盤はこの植民地の繁栄に大きく依存していた。

ハイチ革命(サン・ドマングの革命)は、このような歴史的状況下で勃発した。マルチニックの作家エメ・セゼールによれば、ハイチ革命とは、自治と商業の自由を求める島の大白人のフロンド反乱、社会的平等を求める混血階層<sup>ミュラートル</sup>の反乱、自由を求める黒人奴隷の革命が継続的かつ複合的に生じたものであった。そして、最終的にこの複合的革命を成功に導き、国家的独立を達成したのは、自由を求める黒人奴隷たちだった<sup>8)</sup>。以下にこの革命の経緯を、フランス本国の国民公会における奴隷制廃止決議と、ナポレオンによるサン・ドマング遠征という二つの局面に分けて概観していくことにする。

### 2-1. 国民公会における奴隷制廃止決議

一般にフランスにおける奴隷制廃止は第二共和政下の1848年という年号がよく知られている。しかしこれはナポレオンが1802年に奴隷貿易の復活と、マルチニック、レユニオン島、フランス島での奴隷制維持を宣言した後の、2度目の奴隷制廃止である。実際にはそれより前に、1794年2月4日、国民公会において最初の奴隷制廃止が決議されている。これは、ヨーロッパの植民地保持国の中で最初の奴隷制廃止決議であり、フランス革命史においても非常に重要な意味を持つ出来事である。

ハイチ革命の展開の中で黒人奴隷の存在が歴史の主体として顕在化してくるのは、1791年8月、カイマンの森に集結した奴隷たちがハイチ北部で大規模な奴隷蜂起を起こしたのが最初である。奴隷たちの精神的指導者ブクマンに率いられたこの奴隷蜂起は、その後聡明な黒人指導者トゥサン・ルヴェルチュールに引き継がれ、彼はハイチ革命の展開において中心的な役割を果たしてゆく。

一方、フランス本国においては、1788年に、コンドルセ、ブリッソらによって「黒人の友の会」が発足して以来、奴隷貿易および奴隷制の廃止の問題はしばしば議論の対象にあがっていた。しかしながら、常に植民地貿易がもたらす利益を優先する保守派の反対により、革命政府の議会において、奴隷制廃止の法案は議決には至っていなかった。

サン・ドマングでは、トゥサン・ルヴェルチュールによって統制された黒人奴隷の軍隊が勢力を広げつつあった。当時カリブ海地域では、植民地の覇権を巡って、フランス、イギリス、スペインが三つ巴の争いを繰り広げていた。1793年3月、トゥサンはスペイン軍と同盟を結ぶという戦略をとり、同年10月、トゥサンとスペインの同盟軍は、サン・ドマング北部を制圧するに至る。フランスにとって、黒人奴隷の革命軍とスペイン軍の同盟が確立したら植民地の存続における死活問題となる。1794年2月4日、サン・ドマングから戻ったデュファイは国民公会で次のような報告をする。

2年来蜂起状態にあった[……]奴隷たちは、恐らく恩恵を受ける好機だと思ったのですが、大挙して我々に奉仕を申し出にやってきました。彼らは武装して、我々の代表者の前でこう主張しました。「我々はニグロであり、フランス人である。我々はフランスのために戦うつもりだ。しかし、見返りとして、我々は自由を要求する。」彼らは、〈人間の諸権利〉も付け加えました。もし我々が彼らを拒絶していたなら、彼らはスペイン軍の提案を承諾していたでしょう。[……]黒人たちは自らの力を感じています。そして、もし我々が彼らの機嫌を損ねたら、彼らはその力を我々に向けることだってあり得たでしょう<sup>9)</sup>。

このような経緯の中、革命フランス政府は1794年2月4日、他の西欧列強諸国に先駆けて、国民公会において奴隷制廃止を決議するに至る。これは、一方では、人権宣言の原則に照らした人道主義的な決定であったと言えるが、他方では、植民地における黒人奴隷蜂起の圧力を受けてやむを得ずなされた決議でもあった。いずれにせよ、この決議を受けて同年6月25日、トゥサンの軍はフランス革命の三色旗を掲げてスペイン軍の駐屯地を攻撃した。トゥサンの率いる黒人奴隷の軍隊は革命フランス政府と合流した。

## 2-2. ナポレオンによるサン・ドマング遠征からハイチ独立へ

一旦は、トゥサン・ルヴェルチュールの軍隊は革命フランスに合流したものの、1799年ブリュメール18日のクーデタでナポレオンが実権を握るに至って、サン・ドマングのトゥサンの軍隊は、来るべきフランスとの全面戦争に備えざるをえなかった。

1801年7月8日、トゥサンは仏領植民地サン・ドマング憲法を公布する。その第1条では、サン・ドマングはフランス帝国と一体を成す植民地だが、植民地の特別法に従うと定規している。そして植民地の法については第20条で、仏領植民地サン・ドマングの名の下に総督が布告すると定めており、第28条において、トゥサン自身が仏領植民地サン・ドマングの終身総督に任命されることが定められている<sup>10)</sup>。

ナポレオンは、このトゥサンのサン・ドマング憲法に怒りをあらわにし、義弟ルクレールの軍隊をサン・ドマングに派兵する。そしてトゥサンに宛てて、サン・ドマング憲法を破棄し、「フランス市民」としてルクレールの軍隊に服従するよう要求する書簡を書いている<sup>11)</sup>。

こうして1802年1月、ルクレールの軍隊はサン・ドマングに到着した。トゥサンの軍隊は徹底抗戦の構えをみせ、サン・ドマングの黒人革命軍とルクレールのフランス軍の全面戦争が始まった。ゲリラ戦を交えた凄惨な戦いが続いた。

同年5月、トゥサンはルクレールの提案した休戦に合意する。同年6月、策略によりトゥサンは逮捕され、本国に護送される。革命の精神的支柱であったトゥサンの逮捕は、黒人革命軍のフランスに対する憎悪をより募らせることとなる。同年7月、グアドループで奴隷制が復活したという知らせが入る。これらの事柄が、革命軍を抗争の最終局面に駆り立てる。すなわち仏領植民地サン・ドマングの独立戦争である。

トゥサンの後継者デサリーヌは「独立」のキーワードを掲げ、フランス軍に対し徹底抗戦をする。翌年1803年12月、フランス軍は降伏、撤退。この戦争でフランス軍は5万人、サン・ドマングの黒人革命軍はその倍の死者を出したであろうと言われている<sup>12)</sup>。そして1804年1月1日、仏領植民地サン・ドマングは新生ハイチ共和国として独立を宣言する。これが、トゥサン・ルヴェルチュールによって率いられた黒人奴隷の軍隊が達成したカリブ海の革命であり、世界初の黒人共和国の誕生である。

## 3. 『ブラック・ジャコバン』(1938年)

### 3-1. ハイチ革命とアフリカ問題、マルクス主義

1938年に出版されたC・L・R・ジェームズの『ブラック・ジャコバン』は、カリブ海出身の知識人によって書かれた、ほぼ最初のとも言えるハイチ革命についての研究書である。ハイチ革命に対するカリブ海知識人の視座とは、肌の色によって抑圧され、他者への従属を強

いられた者たちへの共感と連帯意識であり、そこに解放を勝ちとる自立的主体の形成を見てとる。1930年代のジェームズにとって、ハイチ革命とは、どのような問題系の中でどのような意味を持つものとして捉えられているのであろうか。

結論から言えば、当時のジェームズにとって、ハイチ革命の歴史的意義はアフリカ解放の実現に貢献するものであった。20世初頭、アフリカにはヨーロッパの帝国主義の抑圧に苦しむ無数の黒人民衆がいた。彼らは、ヨーロッパによる支配と抑圧の頸木から解放されなければならなかった。しかしながら、彼らの解放は、ヨーロッパによって与えられるものであってはならなかった。アフリカ人は、自らの力で、その自由を勝ち取らなければならなかった。帝国主義と植民地政策の歴史の中で「人間」としての資格を剥奪されてきた無数の黒人たちは、自らの力と意志で、主体的存在としての自己を形成するに至らなければならない。それゆえ、黒人の自由獲得、黒人の主体形成は、革命的な行為によって達成されなければならないのだ。ハイチ革命は、アフリカに起源をもつハイチの黒人奴隷が自らの力で自由と独立を獲得し、世界初の黒人共和国を建設するに至った記念碑的な出来事である。ジェームズにとってハイチ革命を研究することは、来るべきアフリカ解放に繋がる意味を持っていた。ハイチ革命は、アフリカ解放のための教科書であった。

ジェームズは『ブラック・ジャコバン』の1980年版の序文で、この著作を執筆した動機について、次のように説明している。

私は、アフリカ、中間航路、米国、そしてカリブ全域で迫害され抑圧されるアフリカ人の姿を読んだり聞いたりすることに疲れきっていた。私の本では、アフリカ人、あるいはアフリカ系の子孫の人々を、つねに他の人々から搾取され虐待されるような客体としてではなく、みずから大規模な行動を起こし、自分たちの必要のためには他の人々も指導するような主体的存在として描こうと決意した。それまでに読んだハイチ革命の本は、その真実の歴史的価値を何ら伝えていないものばかりだった<sup>13)</sup>。

このようにジェームズは、一方でハイチ革命の意義をアフリカ解放の契機に結びつけるが、他方でそれをマルクス主義の理論と実践に関連付ける。ジェームズは、常にハイチ革命の歴史を検討する時、それをマルクス主義的な観点から分析する。例えばスチュアート・ホールは、ジェームズのこの著作について次のように評価している。

この本は[……]カリブにおける最初の奴隷革命、すなわちハイチの奴隷革命の、最初でかつもっともよく練り上げられた歴史書だった。[……]出来事の見事にドラマティックな感覚と同時に、ジェームズは歴史的な脈とすべての出来事のマルクス主義的理解を示している<sup>14)</sup>。



それゆえ、この時期のジェームズのマルクス主義への接近とアフリカ解放運動の結節点として結実したのが、この『ブラック・ジャコバン』であったと言えよう。ジェームズ自身、前述の序文で次のように認めている。

私はジョージ・パドモアや、ロンドンに本拠を置く彼の黒人組織と協働していた。[…]  
本書はカリブよりもむしろアフリカを念頭において執筆した。本書の大きな価値の一つは、1789-1815年に世界で起こった大変動にしっかりと基礎づけられている点であろう。それに加えて、自身の西インド体験とマルクス主義研究とにより、私にはこれまでの多くの著作作家が見逃してきたことが見えてきた<sup>15)</sup>。

またジェームズは同時に、カリブ海の知識人の視点から、ハイチ革命におけるフランス革命の精神的影響を認めている。ジェームズは、フランス革命の歴史的限界、とりわけナポレオンによるハイチへの抑圧の悪辣さを十分に認識しながらも、フランス革命を抑圧された階層が自らの力で自由を勝ち取った革命として評価する。それゆえ彼の中で、フランス革命におけるフランスの民衆の解放、ハイチ革命におけるサン・ドマングの黒人奴隷の解放、ロシア革命におけるロシアのプロレタリアートの解放、そして来たるべきアフリカ革命における植民地主義下で抑圧されているアフリカ人の解放が、それぞれ固有のコンテクストを持ちながらも、相互に深く絡み合い影響しあうことになる。そして彼にとって、これらの抑圧された階層の解放運動を読み解く為の共通分母となる理論が、マルクス主義であった。

当時のジェームズにとってアフリカの解放が最終目標だった。アフリカの解放こそが、世界中に離散しているアフリカ系黒人の総合的かつ最終的な解放に結びつくものだった。マルクス主義はその為の理論的支柱である。ハイチ革命は、アフリカ解放という目標に貢献しうる、重要な、しかしその重要性にもかかわらずそれまでほとんど研究がされてこなかった、模範であった。フランス革命とロシア革命は、ハイチ革命を理論的に分析する際の参照項であった。ジェームズは『ブラック・ジャコバン』において、このような視点でハイチ革命を捉えていた。

ジェームズは常に、フランス革命に対しては両義的な立場をとる。彼はフランス革命のブルジョア的性質から来る欺瞞には徹底して批判的だが、その一方でフランス革命の原動力となった民衆の力に大きな可能性を見いだしている。そして、フランス革命におけるフランスの民衆とサン・ドマングの黒人奴隷を積極的に結びつける。

まず、ジェームズはフランス革命を可能にした社会的背景について、次のように分析する。

奴隷貿易と奴隷制がフランス革命の経済的基盤であった。人類の歴史の悲しいアイロニーである[……。奴隷貿易によってボルドーやナントで築かれた富が、ブルジョワジーに自由を要求する自尊心を与え、人類の解放に貢献したのだ<sup>16)</sup>。

そしてフランス革命を経済的に支えた海運ブルジョワジーが深くかかわっていた植民地経済と革命の理想の間の矛盾を指摘する。

フランスのブルジョワジーはいつか植民地の問題に直面しなければならなかったが、できる限り長くこの問題を誤魔化そうとしていた。[……]海運ブルジョワジーは、植民地問題が出るたびに、顔を赤くして「人権宣言」を彼らのポケットにしまい込むのだ<sup>17)</sup>。

革命フランス政府は、その「人権宣言」の理想とはうらはらに、植民地問題に関しては一貫したブルジョワ的強欲さを持ち続けていた。植民地主義の利益がもたらす経済的基盤が革命推進の原動力となっていたからだ。そしてこのブルジョワ的性質は、ナポレオンの台頭とその帝国主義政策によって、一気に顕在化する。ジェームズは一貫して、フランス革命が内包するこのブルジョワジーの欺瞞を糾弾する。

しかしその一方で、1794年の国民公会における奴隷制の廃止決議は、圧倒的な「フランスの民衆の声の反映」であったと高く評価する。ジェームズにとってこの時期のフランスは「政府と民衆が一体となりえた」理想的な時期であった。

ロベスピエールと山岳派はフランスに強力な政府を打ち立てた。国民公会はついに封建諸法を廃止し[……]、人民の信頼を勝ち得た。政府は[……]人民と信頼関係に入った。というのも、政府は人民以外に頼るべきものはなかったのだ。類い稀な犠牲と献身の高揚が、革命フランスとパリを熱狂させた。レーニンとトロツキーの下ロシアのように、人民には勝利も敗北も誠実に伝えられ、誤ちは公に認められた。今日反動派はギロチンの犠牲となった数千の人々しか見ようとしませんが、1793年3月から1794年7月までのパリは、政治史の中で至高の時代の一つだった。1917年以前で、民衆が[……]政府にこれほど強力な影響を与えた例は他になかった<sup>18)</sup>。

そして、ジェームズはこう結論する。「国民公会の[奴隷制廃止決議という]自発的な寛容さは、まさしく、あらゆる場所から専制と抑圧を無くするというフランス全土に満ちていた意志の反映だった<sup>19)</sup>。」さらにジェームズは、同時代のパリの民衆とハイチの黒人奴隷が強い共感によって結ばれていたと断言する。実際、当時のパリの民衆が植民地の奴隷問題に関

してどのような感情を抱いていたかは、非常にデリケートな問題であり、例えば浜忠雄はこの問題に関しては、それを裏付ける確証的な資料が非常に少ないことから明言を避けている<sup>20)</sup>。しかしながらジェームズは、フェリックス・カルトの資料を頼りに、パリの民衆とハイチの黒人奴隷の間の共感、共闘意識を強調する。

権力に最も近づいたこの数ヶ月の間も、パリの民衆は黒人たちのことを忘れなかった。彼らは黒人たちを兄弟のように感じていたし、旧奴隷所有者に対しては、まるでフランス人自身が鞭打たれて苦しんでいるかのように、彼らを憎んだ<sup>21)</sup>。

また逆に、ハイチの黒人奴隷がフランスの民衆に対して持っていた感情に関してもジェームズは次のように説明する。

奴隷達はフランス革命の噂を聞き、それを彼らのイメージで解釈した。フランスで白人の奴隷が立ち上がり、その主人を殺した。そして今や地上の恵みを享受している。実際ひどく不正確な解釈だったが、彼らは自由、平等、友愛の精神を理解していた<sup>22)</sup>。

このように、二つの革命において、パリの民衆とハイチの黒人奴隷の間の強い共感と信頼関係を見てとるところに、ジェームズの思想の特徴が現れていると言えるだろう。彼にとって、フランス革命におけるフランスの民衆、ハイチ革命における黒人奴隷、ロシア革命におけるロシアのプロレタリアートは、同じ図式の中で、抑圧された階級として、解放の為の同じ役割を果たさなければならなかった。

### 3-2. 革命指導者と民衆

そして、ジェームズは、民衆と革命指導者の関係性の問題に言及する。革命指導者はつねに民衆と向き合い、民衆との信頼関係を築かなければならない。それは革命指導者の絶対的な条件だった。トゥサン・ルヴェルチュールは1798年頃から強力な軍事独裁体制を敷き始める。それは、来たるべきフランスとの決戦に備えて、またイギリスやスペインの侵略を防ぐ為に、不可避な政策であった。サン・ドマングの革命軍は兵力を増強しなければならなかった。ジェームズはトゥサンの指導の独裁的性格について、「それは強制労働であり移動の自由の制限であった」と認めるが、「その必要性はいかなる障害も乗り越えた。彼は、労働者たちの信頼を勝ち得ていた」と、あくまでその正当性を主張する<sup>23)</sup>。ジェームズにとって、必要な独裁を正当化する条件はただ一つ、それは民衆と指導者の間の揺るぎない信頼関係だった。

そして、この著作の最も重要なテーマの一つは、民衆の信頼を勝ち得ていた革命指導者が、次第に民衆と乖離した独裁者に変貌する危険性である。ジェームズの解釈によると、トゥサンは最後までフランスからの「独立」をためらっていたという。彼は一貫してフランス革命への共感とフランス共和国への忠誠心を持ち続けていた。ナポレオンが台頭し、フランス革命の精神が既に損なわれるに及んでなお、革命フランスへの盲目的信頼ゆえに、彼は指導者としてなすべきことを見失っていた。非常事態での独裁体制下にあつて、革命指導者の不透明な意図は、民衆の不信を招き、民衆と指導者の乖離につながる。この段階に至つて、トゥサンは民衆と向き合うことを放棄していた。

ジェームズはトゥサンをまずロベスピエールと比較する。

ロベスピエールは民衆と衝突した。それは彼がブルジョワで、民衆は коммуニストだからだ。この衝突は不可避だった[……。]しかしトゥサンと彼の人民の間には、その展望も目的も根本的に違つてはいなかった<sup>24)</sup>。

トゥサンと黒人奴隷たちは、利害や展望や目的を共有できる、同一の人種と階級に属する指導者と民衆であつた。しかし、それにもかかわらず、トゥサンは道を誤り、その民衆と乖離する。革命指導者の誤りとは何だったのであろうか？

次にジェームズは、トゥサンをレーニンと比較する。

レーニンは、党と民衆に余すところなく革命のあらゆる歩みを知らせていた。そして労働者国家におけるブルジョワ奉仕者の立場を注意深く説明した。一方トゥサンは何も説明しなかった。[……。]ためらいがあつてはいけなかったのだ。トゥサンは[ナポレオンの]強力な派兵の意図が奴隷制の復活以外にありえないことを宣言し、民衆に抵抗を呼びかけ、独立を宣言し、それを受け入れないものからは財産を没収し彼の支持者に分配すべきだったのだ<sup>25)</sup>。

ジェームズはトゥサンの過ちについて、「トゥサンは戦争のさ中にさえ、フランスとの繋がりを維持しようとした。ハイチにとっての長く険しい文明化への道のりのために、[トゥサンにとって]それは必要なことだった<sup>26)</sup>」と説明する。彼は植民地を適切に統治できることをナポレオンに証明しようとした。しかしそれは誤りであつた。「常に、とりわけ戦闘の最中は、指導者は彼自身の民衆のことを考えてなければならない。重要なのは、民衆が何を考えているかであり、帝国主義者が何を考えているかではない<sup>27)</sup>。」

トゥサンの誤ちを補い、その逮捕後黒人たちの指導者の立場を引き継いだのは、彼の部下

のデサリーヌであった。ジェームズによると、デサリーヌにはためらいがなかった。彼は迷わず「独立」というキーワードを人民に伝えた。この無学の軍人はフランス文明に対して特別な愛着を持っていなかった。彼は白人を安心させる気など毛頭なく、黒人民衆に伝えるべきことを明確に伝え、彼らに安心感を与えた。デサリーヌは革命的指導者の資質を備えていた。彼は的確な表現で伝えるべき内容を黒人民衆に語りかける。

勇気を持つのだ。[…]我々は奴らを急襲するのだ。奴らを撃破するのだ。収穫物を焼き払い、山中に退却しよう。奴らはこの島を守るなどできず、島を出てゆくしかなくなるだろう。その時こそ、私はあなた方に独立をもたらそう。もはや我々の間に白人などいなくなるのだ<sup>28)</sup>。

ハイチの国家的独立は、最終的にこのデサリーヌ指導のもとで達成され、「史上初めての黒人共和国」が誕生する。そしてこの新たな黒人指導者は、ためらうことなくかつての主人であった島の白人の虐殺に着手する。

スチュアート・ホールは、ジェームズの分析するトゥサンからデサリーヌへの権力の移行について次のように再定義する。

ルヴェルチュール自身はナポレオンに近かった。ナポレオンに起こったのと同じことが彼にも起こった。つまり彼は民主的運動を率いるかわりに貴族主義的運動のカリスマ的指導者に成り下がっていた。「ボナパルティズム」とはスターリンに起こったことを表すトロツキズムの概念である。ルヴェルチュールはボナパルティズムの誤りからジャン＝ジャック・デサリーヌにとって代われ、デサリーヌは正真正銘の政党機関員になることを、つまりスターリンのようになることをためらわなかった<sup>29)</sup>。

しかしながら現代の我々はスターリンの過ちを知っている。同様にジェームズも、デサリーヌが果たした歴史的役割を評価しながらも、最後に彼の犯した過ちの大きさを指摘する。

白人の虐殺は悲劇であった。[…]ハイチはその結果生じた孤立化に大いに悩むことになる。何世代にも渡りハイチから白人の姿が消え、この不幸な国は、経済的に崩壊し、その住民は社会文化を欠き、その虐殺による二重の困難に避けがたく向き合わなければならなかった<sup>30)</sup>。

そしてジェームズは、18世紀末から19世紀初頭にかけて展開したこのサン・ドマングの

黒人革命の価値と可能性、黒人指導者たちの果たした役割、および彼らの誤ちを、20世紀初頭のアフリカ解放の為の教訓とすべきだとして、この著作を締めくくる。ジェームズは本書の最後にこう記している。

アフリカの黒人たちは、サン・ドマングの黒人たちに比べて、より進歩しているし、より準備が整っている。[…]行動を起こした人の中から、指導者たちが現れるだろう。[…]彼らは、トゥサンがレナール師を読んだように、レーニンやトロツキーのパンフレットを読むだろう<sup>31)</sup>。

### 3-3. 1930年代という時代

前述のように、この著作が発表された1930年代のロンドンでジェームズの活動のキーワードになったのは、マルクス主義とアフリカ解放運動だった。マルクス主義に関して言えば、より厳密には、ジェームズはイギリスのトロツキズムに接近していた。それは必然的にスターリニズム批判へと繋がった。ジェームズは「スターリニ的支配形態の権威主義と民主主義の欠如」を批判し、「人々の意識に活力が与えられず、党が人々にとって替わる革命形態」を批判した<sup>32)</sup>。このスターリニズム批判の態度は、そのままトゥサンおよびデサリーヌの革命指導者としての過ちに対する批判に繋がる。同時に1980年版の『ブラック・ジャコバン』序文でジェームズ自身が語っているように、この時期彼は、ジョージ・パドモアと彼の黒人組織と協働して、パン・アフリカニズム運動に関わっていた。パドモアはコミンテルンの運動家で、トロツキストであるジェームズはパドモアと党派を同じくしなかったが、そのことは二人がパン・アフリカニズムの運動において協調する上での障害にはならなかった。いずれにせよ、来るべきアフリカ解放に繋がるべきハイチ革命研究は一貫してマルクス主義的観点で行われた。後進地域アフリカの解放の為に後進国ロシアの革命を成功させた理論を参照するというのが、1930年代という時代のロンドンにおいてジェームズがとりえた選択肢だった。マルクス主義とロシア革命の可能性、とりわけトロツキズムの世界革命論は、黒人解放運動に結び付く十分な可能性を持っていた。

ジェームズは、ハイチ独立戦争における、フランスのブルジョワジー対サン・ドマングの黒人奴隷の対立の図式においても、人種の問題以上に階級の問題を重要視する。独立戦争の最終局面についてジェームズはこう書いている。「植民地は荒廃し、黒人と白人はお互いに増大する残忍さをもって殺し合った。それは人種戦争と呼ばれるが、その原因は彼らの肌の色の違いにあるのではなく、フランスのブルジョワジーの貪欲さにあった<sup>33)</sup>。」ジェームズは、決して人種の問題を軽視してはいなかったが、ハイチ独立戦争の図式においては人種の問題は根本的な階級の問題に起因するものとして扱われる。

このことは、全く同じ時期、すなわち1930年代、パリにおいて一人のマルチニック出身の黒人詩人がトゥサン・ルヴェルチュールの重要性について次のように謳った態度と対照的である。「ハイチ、そこでネグリチュードは始めて立ち上がり、ネグリチュードはその人間性を信じるのだと言った。[...]白い死の白い叫びに挑んだ唯一の男、トゥサン、トゥサン・ルヴェルチュール<sup>34)</sup>。」1939年にパリで発表されたエメ・セゼールの処女長編詩『帰郷ノート』において、セゼールもハイチ革命の重要性を、ごく簡潔なフレーズで、しかしかくも雄弁に謳い上げている。このマルチニックの黒人詩人にとっては、ハイチは何より「ネグリチュード」の意識が、すなわち黒人が自分を黒人だと肯定的に自覚する意識が初めて生まれた場所であり、しかもその意識は狭量な人種イデオロギーに墮するのではなく、普遍的な人間性を信じる態度なのだと言った地であった。セゼールにとってハイチ革命の成功は、カリブ海の黒人が黒人としてのアイデンティティを最初に獲得したという意味で、かけがえのない重要性を持つ。セゼールにとってハイチ革命は、ネグリチュードの問題系、すなわち奴隷制という苦難の歴史を経験したひとつの人種が共有する歴史意識の中で語られるべき出来事であった。

一方ジェームズは、来るべきアフリカ解放にマルクス主義の原理を接ぎ木するために、先例としてのハイチ革命を研究した。ハイチ革命は黒人奴隷という抑圧された階級が自らの力でその解放を勝ち得た革命であり、その指導者たちは、革命指導者がやらなければならないことと、やってはならないことを、教訓として残した。階級闘争を戦う中で顕在化する革命指導者と民衆の関係性の問題が、ハイチ革命が20世紀のアフリカの人民に残した最大の教訓であった。

## 4. 「トゥサン・ルヴェルチュールからフィデル・カストロまで」(1963年)

### 4-1. 1960年代のカリブ海

1919年W・E・B・デュボイスの主催によりパリで第1回大会が開催されたパン・アフリカ会議は、その後第5回の1945年まで続いた。この時期パン・アフリカニズムは世界的に活動の範囲を広げており、ジョージ・パドモアの活動に象徴されるように、1930年代のロンドンもまたその例外ではなかった。また同時期のパリにおいてはエメ・セゼール、レオポール・セダル・サンゴールらによってフランス語圏における初の黒人文化運動であるネグリチュード運動が誕生していた。アフリカの問題と黒人問題は世間の注目を集めていた。そのような時流の中でジェームズは『ブラック・ジャコバン』を執筆した。しかし、時代の潮流が実際のアフリカ解放、すなわちアフリカ諸国の政治的独立に結びつくには、時期尚早だった。

アフリカ諸国の独立は、主に1950年代後半から60年代前半にかけて実現した。それに並行してカリブ海でも、キューバではキューバ革命が起こり、トリニダード・トバゴ、バルバドス、ジャマイカといった英領の島々も独立を果たしている。この時期に至って、脱植民地化の問題は現実社会が直面すべき具体的問題となった。ちょうどその時期、マルチニックにおいてネグリチュード運動の旗手エメ・セゼールは、『ブラック・ジャコバン』に並ぶカリブ海知識人によるハイチ革命研究の名著『トゥサン・ルヴェルチュール——フランス革命と植民地問題』を出版する。1962年のことだった。そして翌年1963年、ジェームズは秀逸なカリブ海文化論「トゥサン・ルヴェルチュールからフィデル・カストロまで」を発表する。

本論考で十分に扱う余裕はないが、セゼールの『トゥサン・ルヴェルチュール』は、ジェームズの『ブラック・ジャコバン』がハイチ革命とフランス革命の民衆レベルでの協働関係を積極的に認めたのと対照的に、ハイチ革命はフランス革命の影響を受けながらもそこからは独立した固有の問題系を持つ革命であると主張する。「フランスの植民地においてフランス革命は存在しなかった。フランスの植民地では[...]フランス革命との繋がりを持ちながらも固有の法則と特殊な目的に従って展開した固有の革命があったのだ<sup>35)</sup>。」そして、セゼールにとってハイチ革命の持つ問題の固有性は植民地という政治制度が生み出す問題に還元される。そしてこの「植民地の問題」、すなわち西欧諸国が継続している植民地主義政策の問題は、ハイチ革命の当時と同様に1960年代においても存続している。セゼールは言う。「サン・ドマングは、その社会的、経済的、人種的な複雑さの中で、近代で最初に、この大問題を現実的な問題として提起した国である。それは20世紀においても解決困難な問題、すなわち植民地問題である<sup>36)</sup>。」1939年に『帰郷ノート』を発表した時点では、セゼールにとってハイチ革命とその指導者トゥサン・ルヴェルチュールの存在は、ネグリチュードという人種意識に関わる象徴的なものであったが、1962年の時点では、彼にとってのハイチ革命はなにより「植民地の革命」であり、それは植民地問題という現実の政治的・社会的問題に結び付けながら研究されるべき事象であった。アフリカおよびカリブ海において脱植民地化の問題、すなわち政治的独立や自治の問題が現実的なものとして立ち現れてくる1960年代初頭にセゼールがこのハイチ革命研究を発表したことは、時代の流れに沿っている。

そして、ジェームズの「トゥサン・ルヴェルチュールからフィデル・カストロまで」もそのような時代的文脈の中で発表される。これは1963年版の『ブラック・ジャコバン』の補論として収録されたものだが、そこでジェームズがハイチ革命を捉える視座も1938年の時点でのそれと異なっていた。1938年の時点でジェームズは、ハイチ革命を来るべき「アフリカの革命」に結びつけ、黒人奴隷の問題を抑圧された階級の一般の問題に還元して考える傾向があった。しかしながら1963年の補論においてジェームズは、ハイチ革命をカリブ海



という地域的問題系の中で捉えるようになる。勿論彼はマルクス主義的立場を捨ててはいない。しかしそこで問題になっているのは、アフリカ解放という他所の問題に還元される階級闘争ではなく、カリブ海という自らのよって立つ地域性に立脚した問題だった。ハイチ革命によって、カリブ海の地域的アイデンティティは初めて誕生した。そして必然的に、18世紀末にカリブ海のフランス領植民地で勃発したこの革命は、20世紀の隣国の革命、すなわちキューバ革命に結びつけられる。ジェームズは次のように主張する。

トゥサンの革命は18世紀の革命だが、カストロの革命は20世紀の革命だ。しかし、この1世紀半の隔たりにも関わらず、双方ともに西インドの革命である。これらの革命を生み出した人々、解決すべきその問題や試みは、西インドに固有のものである。それらは、固有の起源と固有の歴史の所産なのだ。西インド人はハイチ革命において、初めて自らをひとつの民族として自覚するに至った。キューバ革命は、その最終的な結果がどうであれ、カリブの民族アイデンティティ探求の最終段階を示す。散在する島々にあつて、そのアイデンティティ探求のプロセスには協調に欠け迷走する時期があった。噴出や飛躍や破局の時期があった。しかし、そこには一貫した運動性があり、それは明確で力強いものだった<sup>37)</sup>。

セゼールは、ハイチ革命の持つ意味を「植民地の革命」という植民主義によってもたらされた政治的・経済的構造に関わる問題系の中で捉えた。ジェームズは、カリブ海の歴史が生み出した地域的特殊性を更に具体的な言葉で説明する。

西インドの歴史は、二つの要素に支配されてきた。すなわち砂糖プランテーションと黒人奴隷制である。[...]砂糖プランテーションと奴隷制が存在した地域ではどこでも、一定のパターンがある。それは固有のパターンで、ヨーロッパ的でも、アフリカのでも、大陸アメリカ的でも、土着的と言え表せるものでもなかった。それは独特に西インド的なものであり、他のいかなる地域とも異なっていた<sup>38)</sup>。

従って、ハイチ革命の固有性、その地域的特殊性は、ジェームズの考えでは「砂糖プランテーション」と「奴隷制」という収奪のシステムの問題がその中核にある。同じくトリニダドの歴史家であるエリック・ウィリアムズが、ジェームズに非常に近い着想で、『資本主義と奴隷制』を執筆したことは興味深い<sup>39)</sup>。

#### 4-2. カリブ海のアイデンティティを求めて

カリブ海人のアイデンティティは、砂糖プランテーションと奴隷制に象徴される特殊かつ暴力的な歴史を経験してきたという共通の記憶、そしてある時点でそれを乗り越えることができたという歴史的意識の上に打ち立てられなければならなかった。そのような地域のアイデンティティの確立を最初に可能にしたものこそハイチ革命であった。それゆえハイチ革命はこの地域において象徴的な意味を持ち得た。

しかし、カリブ海の間人々は、長い間このハイチ革命の重要性を忘れていた。ジェームズによると、それはこの地域の人々に強制されてきた「西欧型の教育」のせいであるという。そして、このカリブ海のアイデンティティの「再発見」の最初の契機となったものが、20世紀初頭のアフリカ文化の再評価と1930年代のアフリカ解放運動へのコミットメントだった。「西インド人の意識の中で、アフリカが、西インドの民族アイデンティティの発展の一段階において役割を演じることは明らかだった<sup>40)</sup>。」しかし1930年代に、カリブ海の植民地の内部にとどまって、そこでアフリカの価値と重要性を発見することは困難だった。ジェームズによれば、宗主国の「教育」によって精神的に同化されてしまったカリブ海人は、一旦海外に出る必要があった。「自由への最初のステップは海外に出ることだった<sup>41)</sup>。」カリブ海の知識人は、彼らの故郷の島嶼ではなく、宗主国の内部で、すなわちアメリカ、イギリス、フランスの首都で、アフリカを「発見」した。ジェームズは、カリブ海からヨーロッパに旅立ち、そこでアフリカの重要性を発見した3人のカリブ海知識人を挙げている。すなわち、ジャマイカのマーカス・ガーヴィー、トリニダートのジョージ・パドモア、そしてマルチニックのエメ・セゼールである。彼らは宗主国の首都で黒人意識に目覚め、アフリカの重要性を再確認する。しかしながらジェームズによれば、そのような黒人意識の意識は、ハイチの黒人奴隷たちによって1世紀半前に既にカリブ海の地に確立されていた。ガーヴィー、パドモア、セゼールらは、それらを再発見したに過ぎない。しかし、その再発見はカリブ海のアイデンティティを確立する過程で必要なものだった。ジェームズは言う。「西インドの民族アイデンティティへの道は、アフリカを經由して敷かれていた<sup>42)</sup>。」

こうして、宗主国でのアフリカ再発見という契機を經由して、カリブ海の知識人たちの意識の中心は再び、カリブ海という自らの場所に戻ってくる。脱植民地化と独立という現実政治の問題が重要性を増し、1960年代になるとアイデンティティの問題はそのような現実的問題との関係性の中で語られるようになった。1963年にジェームズの「トゥサン・ルヴェルチュールからフィデル・カストロまで」が発表され、セゼールは1962年に歴史研究『トゥサン・ルヴェルチュール』、1963年に戯曲『クリストフ王の悲劇』と、ハイチの歴史を題材とした作品を連続して出版する。キューバではアレホ・カルペンティエールによって、1949年にハイチ革命とクリストフ王の統治を題材とした小説『この世の王国』が出版され、1962

年にはカリブ海人にとっての「もう一つのフランス革命史」といえる、フランス革命期のカリブ海を舞台にした小説『光の世紀』が出版される。1970年にはエリック・ウィリアムズによってカリブ海諸地域の通史を扱った『コロンブスからカストロまで——カリブ海史 1492-1969』が出版され、1980年にはハイチ人作家ルネ・ドゥペストルの『こんにちは、そしてさようならネグリチュード』によって、ネグリチュードの歴史におけるハイチの重要性が再定義される。

これらの作品では共通して、ハイチの存在が、カリブ海の歴史の中で、より厳密に言えばカリブ海の地域アイデンティティ探求の歴史の中で、常に中心的な役割を演じてきたことが語られる。ジェームズは、このカリブ海文化論を次のような言葉で締めくくっている。

西インドの作家たちは、西インドと西インド人を発見してきた。混乱の今世紀中葉において人々は自己の発見に興味を持ち、自己を発見することを決意した。[...]情熱は涸れたのではなく、内向していたのだった。トゥサンは情熱の為に命を懸けた。苦悩の極みまで引き裂かれ、ねじ曲げられ、引き伸ばされ、悪性の毒薬を注入されたこの情熱は、フィデルが開始した革命の中に、生き続けていた。それは西インドの、西インド人の情熱だった。その為に、最初で最も偉大な西インド人であるトゥサンは、命を懸けたのだ<sup>43)</sup>。

本論考ではこれまで見てきたように、トリニダード出身のC・L・R・ジェームズのハイチ革命研究を概観してきた。しかしながら彼一人を扱っただけでは、カリブ海知識人がハイチ革命をどう評価しているのかを一般的に定義することは難しいであろう。今後、上に挙げたマルチニックのエメ・セゼールによる『トゥサン・ルヴェルチュール』、『クリストフ王の悲劇』、キューバのアレホ・カルペンティエールによる『この世の王国』、『光の世紀』のような作品におけるハイチ革命の解釈と照らし合わせ、複合的に研究することが求められる。

いずれにせよハイチ革命は、フランス革命の一部としてとらえられながらその限界を指摘しうる事件であったと同時に、カリブ海の人間にとってそれは、固有の歴史的・地域的条件によって固有の意味と価値を持ち、その地域的アイデンティティの確立を可能にしたという意味で、記念碑的な象徴性を持つものであったと言える。

## 注

- 1) 全国歴史教育研究協議会編、『世界史用語集改訂版』、山川出版社、2022、pp. 224-225。同書では掲載されている用語の重要度（「頻度」）を7段階にカテゴライズしており、4以上を「世界史を学ぶ上で必要と思われる頻度」としている。*Ibid.*, p. 3.
- 2) 例えば山川出版社の世界史Bの教科書にはハイチに関して「ナポレオンが派遣したフランス軍

- をうち破って1804年には史上初めての黒人共和国ハイチが誕生した」という記述がある。木村靖二, 岸本美緒, 小松久雄, 『詳説世界史改訂版』, 2023, 山川出版社, p. 272.
- 3) Ronald Segal, *The Black Diaspora*, 1995, Faber and Faber, p. 126. (ロナルド・シーガル, 『ブラック・ディアスポラ』, 富田虎男監訳, 1999, 明石書店, p. 236. 原典の引用に関し, 邦訳が存在しそれを参考にした場合は, 注のカッコ内にそちらの参照先も明記する。以下の引用も同様。) また, 1805年のハイチ憲法に関しては, たとえば以下のサイトを参照するとよい。 <https://haitidoi.com/constitutions/1805-2/> (2023年6月19日閲覧)
  - 4) François Furet, Mona Ozouf, *Dictionnaire critique de la Révolution française - Evénement*, 1992, Flammarion, p. 261. (フランソワ・フェレ, モナ・オズーフ, 『フランス革命事典1 事件』, 河野健二, 坂上孝, 富永茂樹監訳, 1998, みすず書房, p. 163.)
  - 5) 浜忠雄, 『カリブからの問い／ハイチ革命と近代世界』, 2003, 岩波書店, pp. 216-217.
  - 6) *Ibid.*, pp. 217-221 参照。
  - 7) Eric Williams, *From Columbus to Castro: The History of the Caribbean 1492-1966*, 1984, Vintage Books, p. 237. (エリック・ウィリアムズ, 『コロンブスからカストロまで I / カリブ海域史, 1942-1969』, 川北稔訳, 1978, 岩波書店, p. 307.)
  - 8) Aimé Césaire, *Toussaint Louverture / La Révolution française et le problème colonial*, 1981, Présence africaine, p. 331.
  - 9) *Ibid.*, pp. 216-217.
  - 10) 浜忠雄, 『ハイチ革命とフランス革命』, 1998, 北海道大学図書刊行会, pp. 308-311 参照。
  - 11) Aimé Césaire, *op. cit.*, p. 288.
  - 12) Ronald Segal, *op. cit.*, p. 126. (pp. 234-235.)
  - 13) C. L. R. James, *The Black Jacobin: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*, 1980, Allison & Busby, p. v. (C・L・R・ジェームズ, 『ブラック・ジャコバン／トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』, 青木芳夫監訳, 1991, 大村書店, p. 7.)
  - 14) スチュアート・ホール, 「C・L・R・ジェームズの肖像」, 浜邦彦訳 in 『現代思想／3月臨時増刊／スチュアート・ホール／1998 vol. 26-4』, 1998, 青土社, pp. 108-109.
  - 15) C. L. R. James, *op. cit.*, p. 6. (p. 8.)
  - 16) C. L. R. James, *The Black Jacobins / Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*, 1989, Vintage Books Edition, p. 47. (C・L・R・ジェームズ, *op. cit.*, pp. 58-59.)
  - 17) *ibid.*, pp. 67-69. (p. 76.)
  - 18) *ibid.*, pp. 138-139. (pp. 140-141.)
  - 19) *ibid.*, p. 141. (p. 144.)
  - 20) 浜忠雄, 『ハイチ革命とフランス革命』, *op. cit.*, p. 139.
  - 21) C. L. R. James, 1989, *op. cit.*, p. 139. (p. 141.)
  - 22) *ibid.*, p. 81. (p. 89.)
  - 23) *ibid.*, p. 156. (p. 157.)
  - 24) *ibid.*, p. 286. (p. 283.)
  - 25) *ibid.*, p. 284. (pp. 280-281.)
  - 26) *ibid.*, p. 289. (p. 266.)

- 27) *ibid.*, p. 286. (p. 283.)
- 28) *ibid.*, pp. 314–315. (p. 310.)
- 29) スチュアート・ホール, *op. cit.*, p. 109.
- 30) C. L. R. James, 1989, *op. cit.*, p. 374. (p. 366.)
- 31) *ibid.*, pp. 376–377. (pp. 369–370.)
- 32) スチュアート・ホール, *op. cit.*, p. 107.
- 33) C. L. R. James, 1989, *op. cit.*, p. 355. (p. 349.)
- 34) Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, 1983, *Présence africaine*, pp. 24–25. (エメ・セゼール, 『帰郷ノート／植民地主義論』, 1997, 平凡社, p. 46.)
- 35) Aimé Césaire, *Toussaint Louverture*, *op. cit.*, p. 24.
- 36) *ibid.*, p. 24.
- 37) C. L. R. James, 1989, *op. cit.*, p. 391. (p. 383.)
- 38) *ibid.*, pp. 391–392. (pp. 383–384.)
- 39) スチュアート・ホールによると, ウィリアムズの『資本主義と奴隷制』に着想のヒントを与えたのは, ほかならぬジェームズ自身だったと言う。スチュアート・ホール, *op. cit.*, p. 109参照。
- 40) C. L. R. James, 1989, *op. cit.*, pp. 395–396. (p. 388.)
- 41) *ibid.*, p. 402. (p. 396.)
- 42) *ibid.*, p. 402. (p. 396.)
- 43) *ibid.*, pp. 417–418. (p. 412.)